

人づくりを通じて、新しい地域のあり方を創生する静岡県。
富国徳の精神で切り開く明るい未来の背景には、
人と地域が生み出す革新力がある。
今回は、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会で得た、
本県の成果とレガシー創出への取り組みを紹介する。

不退転の決意で臨んだ 東京2020大会

昨年夏に開催された東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会は、新型コロナウイルスのパンデミックにより、前代未聞の一年延期という事態を経て、厳重な感染防止体制の中で行われた。本県は県内開催が決まった当初から、安全安心な大会を運営するために万全の準備を進めてきたが、刻々と変わる感染状況の中で、日々難しい判断を迫られた。全国での聖火リレーの規模縮小、チケットの払い戻し、ボランティアスタッフの辞退など、当時の混乱は記憶に新しい。しかしその状況下においても本県は、オリンピックでは観戦客数を収容定員の50%以内、上限1万人として有観客で開催し、児童・生徒を対象とした「学校

スポーツの聖地へのビクトリーロード！ 東京2020大会の大いなるレガシー

連携観戦プログラム」も実施した。大会を無事に終えることができた背景には、警察、消防、医療、危機管理、教育、福祉、文化、観光、経済、産業、報道など、全ての分野が一体となったオール静岡体制と、関係者全員の「不退転の決意」がある。そのかいあって、県ゆかりの選手が大会で躍動し、オリンピックは日本勢58個のメダルのうち県勢9個、パラリンピックは日本勢13個の金メダルのうち県勢6個という快挙を成し遂げた。県内開催の自転車競技でも日本人選手がメダル獲得や入賞を果たし、会場になった富士スピードウェイ（小山町）、伊豆ベロドローム（伊豆市）、伊豆MTBコース（伊豆市）は大いに湧いた。そんな選手の活躍もまた、観る者の歓喜と感動を誘い、県民の一体感を醸成した。



東京オリンピックの自転車競技（MTB）で盛り上がる開催地。伊豆のMTBコース。



富士スピードウェイ（小山町）で行われた学校連携観戦プログラム。同地は自転車競技・ロードのゴール地点。

レガシーの創出に加え 多様性の理解と交流も加速

以前から「サイクルスポーツの聖地づくり」を進めてきた本県は、東京2020大会の準備段階からレガシーの創出に向けて、自転車人口の裾野拡大や、アスリートの強化・育成等によって自転車文化の醸成を図ってきた。その意味で、東京2020大会は聖地づくりの通過点とも言えるが、大会の成功を受けて取り組みはいつそう加速している。その主なものは、競技会場になった日本サイクルスポーツセンター（CSC）を選

手育成の拠点とし、同時に伊豆半島・東部地域におけるスポーツハブとして活用する動きだ。大会で使用されたMTBコースはさまざまなレベルの方に対応できるコースに改修し、自転車を中心とした多分野（教育、健康増進、医科学、レクリエーション等）での事業展開を進めていくこととしている。

また、大会で注目されたパラスポーツの普及をより力強く推進するため、昨年11月に「静岡県パラスポーツ運動会」を開催。ポッチャや車いすリレー等の4種目で健常者と障がい者がともに汗を流し、多様性の理解と交流を深めた。こうしたパラスポーツイベントは今後も継続していく構えだ。

オール静岡の結束力で スポーツの聖地へ躍進

サイクルスポーツの聖地づくり、パラスポーツへの理解と普及など、本県が東京2020大会で得た成果は計り知れない。その成果を一過性にせず、レガシーとして次代へ確実に継承するために、県はその推進役として、スポーツコミッション推進本部を

立ち上げた。

推進本部の担う業務は、レガシースポーツの拠点創出、スポーツボランティアの組織化と活用、スポーツに関する二元的・戦略的情報発信、スポーツ資源（水ヶ塚公園、愛鷹運動公園、草薙総合運動場、遠州灘海浜公園等）を生かした地域主体の地域づくりなど、多岐に及ぶ。そのため、今後はスポーツ団体、自治体、経済団体、観光関係、教育関係、スポーツ施設等、多分野との連携強化を進めてい

く。課題は公的機関や民間に広がる諸団体をどうまとめるかだが、本県には、東京2020大会がもたらした、オール静岡体制という大きな財産がある。その一体感と信頼感があれば、今大会のレガシーは、大きく発展して継承されていくだろう。それはまさしく、スポーツの聖地づくりに向けたビクトリーロードだ。



大会当日、来場者に笑顔で接するボランティアスタッフ。メッセージは感染対策でボードに表示。



大会で使用されたMTBコースをさまざまなレベルの方が利用できるように改修。MTBに限らず、ウォーキングなどにも活用する。



パラスポーツ運動会で行われた「シッティングバレー」。健常者と障がいのある人が同じコートで汗を流す。